

電車の少女

ピーター・ホワイトヘッド

次第（序文） ジャン・B・ゴードン 著

「本に書いてある通りに書きました。」

ロマン主義文学の教授である年老いたイギリス人は、日本の「雪国」で行われる英文学会に向かうため、電車に乗っている。そこで行われる学会に外国人講演者として招かれたのだ。彼の予定している講演内容は、捨てられたか、あるいは家のない若い少女たちと、ワーズワースやコールリッジ、バイロン、ラスキン、ブルトンらの創作活動に刺激を与えたような薬物との、似通った役割についてである。同じ車両には、年老いた弱々しい日本人男性が、若く愛らしいそれでいて、とても挑発的な西洋風のレザーのミニスカートを履いた女性に付き添われている。その少女は、エキゾチックな顔立ちでありながら西洋風の身なりで着飾り、両方の様相を併せ持っているように見える。この謎めいた2人は果たして恋人同士なのか？それとも看護師と患者、父親と娘といった関係なのか？あるいは、何か外の不思議なつながりがあるのか？この2人の関係性が知的なお客によって徐々に明かされていく。それが、小説家であり、映像作家、さらには陶芸家でもあるピーター・ホワイトヘッドによって書かれた小説『電車の少女』の筋書である。

日本へ来たこの訪問客にとって、信頼できる女性として映った、電車にいた不思議な少女が、本当は彼が想像しているような女性ではないという事をシュリーマン博士のバイリンガルな案内人と退屈な英文学会のための通訳者は、諭そうとします。彼の通訳者と案内人によれば、彼女は全くの「にせもの」で、安いバーにいる女性が、西洋文学的な想像上の伝統的で修練された芸者のような歴史的な役割を演じようとしているだけだそう。シュリーマン博士は、自身の研究題材における初期の批判的思考へのどんな可能性もすでにあきらめており、ある意味、彼女とシュリーマン博士は、そう違わないのだろう。

この小説は、性的なそして知的なものをあきらめている一見さんが立ち入りを拒まれるほどに刺激されるように、私たちがどのように、にせものを信じるようになるかを探っている。作者のようにこの旅行者はいつも「外国人が訪れる場所」として伝統的に指定された場所ではない、本物の日本を探し求めています。想像における欺瞞は、他の模造品と現実の盗作という可能性への道を広げている。『電車の少女』は、川端康成の『雪国』からの変形であり、その語り手であるシマムラも、同じように、異国の本物の経験からは遠ざけられているのです。この小説の語り手であるシュリーマン博士のように、川端も又、電車愛好家でありました。

西洋の想像において、第二次世界大戦による壊滅状態からの日本の回復は、たいてい模倣にあると考えられています。つまり、西洋の製品をまね、安物のコピー品を作り出すことです。ヨーコに対するシュリーマン博士の魅惑の本質には、常に、自分勝手な架空の想像によって完全に創りあげられた、性的モデル、知的モデル、経済モデルがあります。本物でないコピーが単に別の幻想にすぎないという考えになるのはいつか？『電車の少女』を読むことは、ヨーコの事を知るように、単なる複製品に対して私たちが常に抱く間違った期待との最初の出会いです。想像的な旅行者は、現実かそれとも想像か、という私たちの解釈が先行する声から逃れることは出来ません。私たちの記憶や興味あるいは失われた欲求のうち、どれも完全に消え去ることはなく、むしろ無限に再生し続けます。過去と現在、本物とコピー、今の生活と次の生活、これらを切り離すことはできないのです。

ピーター・ホワイトヘッドの『電車の少女』はジャン・B・ゴードン教授のもうひとつの声によって紹介されています。この序文の著者は、能演劇におけるワキと同じように、小説の中の登場人物でもあり、又、小説の外にいる、虚構の家を守らなければいけない文芸批評家という、影響を受けやすい居候のような存在でもあります。彼によるもうひとつの声は、シュリーマン博士によって多くの聞かされたか、想像された中で、この小説の知的な文脈を形作ろうとしています。もちろん、すべての批評の声のように彼の声もまた、読みへの深い理解から気を散らす別の要因になり得るでしょう。『電車の少女』は、過去と現在からの識別可能な声とあいまいな声とで満たされています。沈黙さえも伝達しているような、今日のソーシャルメディアの発信と共に「権限のない」情報が政府によって受け取られるために、わたしたちは、全てが誰かにとって意味を持つ可能性を秘めた環境の中で生活しているのです。芸術と同様に日常生活においても、作家や読者、登場人物、そして批評家が、想像上の旅を共有するとき、話すこと、聞くこと、読むこと、言及することの間、理論上の能空間（ノウゾーン）の中で生き、そして死んでいくのです。